今大会を顧みて

日本教職員バドミントン連盟
副会長　稲石　一雄

「流れもってこい！流れもってこい！」大きな声援を高校生が送っています。この声に後押しされて北海道の選手が躍動しています。最終日の土曜日です。今回はインターハイが遅かったため、異例の遅い開催時期でした。そのため北海道では学校が始まっていて、最終日以外は高校生を補助員にすることができませんでした。当然、応援も最終日だけになりました。今年は開催時期が遅いこともあり参加数が少なくなりました。北海道だけでなく他の都府県でも学校が始まっているところがあり、毎年参加している県や選手が参加できない状況でした。補助員がいないので敗者審判をお願いすることになり、参加者には大変な負担をおかけしました。昨年も「お盆休み」で補助員がいませんでしたので、今後、開催時期について、あるいは補助員の在り方について検討する必要があると感じました。

試合経過について、以前は速報を発行したり会場に貼りだしたりしましたが、今回はその都度JEFのホームページにUPするようにしました。会場でホームページを見てくれると進行状況が分かります。今後もこのようにしていくでしょう。

北海きたえーるは二日前までインターハイのバドミントン競技が行われていた会場です。今大会も連日、ファイナルが多く、熱戦が繰り広げられていましたが、試合は20面の１会場で行えたので比較的円滑に運営できたようです。また会場の雰囲気も静かな感じでした。メーカーの出店は例年より多く、地元の物産店の出店もあり選手の皆さんには便利に過ごしてもらえたかなと思います。

毎日のようにドラマが生まれていましたが、とにかく北海道勢の勢いがすごかったです。開催地ゆえ参加数が多いのはもちろんですが、メダルの数がすごい。金メダルは７個、29種目中の四分の一を獲得しています。圧巻は一般男子団体です。北海道AとBの決勝で、Bが優勝しました。Aチームは昨年、準優勝をしていますので試合の内容・質には目を見張るものがあります。今回、北海道チームには一人一人に小さい賞状をお渡ししました。個人戦でも

40歳以上男子複は北海道のワンツーフィニッシュです。最終的には２位の神奈川県に120点の差をつけて総合優勝しました。大きな文部科学大臣杯と優勝盾を手にして大喜びをしていました。狙っていたということです。

二日目の一般男子複では眼鏡をかけた小柄な愛知県の選手が優勝しました。JEFNEWS80号の表紙は、44回大会の30歳以上女子単で優勝した中林明子選手が表紙を飾りました。中林選手の横で眼鏡をかけた小さな男の子がカップを抱えています。この子が今回優勝した中林寛貴選手でした。親子２代で参加する選手は多いのですが、２代で優勝は過去に一例か二例と珍しいです。JEFとしても喜ばしい結果でした。３日目の30歳以上女子単の決勝は、他の種目が終わった中でファイナルゲームが行われていました。コートも本部席前で、まさにメインイベントの様相です。中盤からリードをしていたのは福岡の樽野選手でした。しかし、終盤で下島選手のネットに浮いた球をたたきに行って、痛恨の空振り。会場から悲鳴のような声が聞こえました。その後、東京の下島選手が逆転して優勝。会場全体から、両選手を讃える拍手が響いていました。そして最終日には高校生の応援が入りました。

今年は久しぶりに沖縄県の選手が出場しました。昨年もエントリーしたのですが、申し込みの不備で棄権しました。それにめげずに今年の参加は大変嬉しいです。昨年はコロナ禍で、県の方針として参加できなかった県がありました。今年は時期の関係で参加できない県がありました。このような状況ですが、JEFへの団体加盟数は増えています。今年も試合には来られないけれど団体加盟はしてくれています。JEFの活動に対してご理解ご協力いただき、大変ありがたく思っています。

さまざまな困難の中で開催された今大会ですが、盛大にそして無事に終了できたことは関係各位の多大なる尽力のおかげと感謝いたします。北海道協会、北海道教職員連盟、レフェリーや審判団、加盟各都道府県連盟の皆さんに厚く御礼申し上げます。